報告

第9回研究大会ワークショップ
「メディア・ディスコースにおけるアイデンティティーの構築」
佐藤 彰（大阪大学言語文化部）

Workshop in the 9th Congress
‘Construction of identity in media discourse’
Akira SATOH (Faculty of Language and Culture, Osaka University)

この報告は、2002年3月2日に千葉大学で行われた第9回研究大会ワークショップ「メディア・ディスコースにおけるアイデンティティーの構築」に関するものである。ワークショップの企画責任者、話題提供者、指定討論者は以下の通りである。
企画責任者 佐藤 彰（大阪大学）
話題提供者 大原由美子（前国立国語研究所招聘外国人研究員）
三宅 和子（東洋大学）
指定討論者 岡本能里子（東京国際大学）

1. 企画概要

現代社会においては、地域社会や家庭の情報伝達に果たす役割が減少し、それに伴って新聞・テレビ・ラジオ・インターネットなどのメディアの影響力が増大している。メディア（ここではマス・メディアを指す）に関しては、マス・コミュニケーション研究、メディア・リテラシー研究、カルチュラル・スタディーズなどの分野において様々な研究が進められている。言語学でも80年代からメディア・ディスコースを分析対象にした話題研究が欧米で展開されるようになり、著作や学会のテーマとしても取り上げられる機会が増えつつある。一方、「アイデンティティー」は現代の人文・社会科学のキーワードの一つであり、言語学においても、言語がアイデンティティーの構築に与える影響についての研究が欧米では数多く報告されている。しかしながら、日本ではメディア・ディスコースおよび言語とアイデンティティーの構築に関する研究は活発とは言えない状況にある。

このような現状を鑑み、本ワークショップでは、日本語のメディア・ディスコースにおけるアイデンティティーがディスコースに反映され、またディスコースがアイデンティティーを再生産する現象を取り上げ分析した。この機会にこの分野に関心をもつ研究者同士が意見を交換し、今後の研究者間の相互交流と、この分野の研究の活性化に貢献することを目的として企画した。

2. 発表概略

当日は、企画概要の説明に続き、各話題提供者が以下の内容の発表を行った。

2.1 大原由美子「新聞における国家アイデンティティーの構築：クリティカル談話分析の試み」

大原は、クリティカル談話分析の立場から、メディア・ディスコースがどのようなイデオロギーを反映し、またそれを基にメディア・ディスコースにおいてどのような日本の国家アイデンティティーが構築されていったかについて検証した。

具体的には、米国同時多発テロ事件発生後2週間
佐藤：報告 第9回研究大会ワークショップ

に発行された全国紙3紙の社説に見られる言語表現を、1）分割、2）国益、3）危機感、義務感をもたらす言語手法、3点において分析した。分割とは、テロを「挑戦」と呼び、善と悪、敵と味方のように我々対相手といった2段対立の形式のなかで描こうとすることができる。国益とは、テロ後の日本の対応はどのような指針のもとに行われるべきかという議論の中で繰り返し現れる表現であり概念である。危機感、義務感をもたらす言語手法は、「非難される」「問われる」「突きつけられる」などに見られる受け身表現や、「一するべきである」「一しなければならない」などに見られる必然性というモダリティの使用を指し、これらの言語表現の多用が社会において「望ましいとされる」日本の位置や役割を形成していることを指摘した。これらの実例を多く示すことにより、国際社会に認められる日本、主要国としての日本という国家アイデンティティが構築される過程を明らかにした。

2.2 佐藤 色「新聞の皇室報道におけるアイデンティティの構築」

佐藤の発表は、新聞の報道における皇族および皇族への発話の引用の仕方を調査することにより、メディア・ディスコースが社会構造や被報道者のアイデンティティを反映し、かつ再生産している現実を明らかにすることを目的とした。分析方法としては文献分析とクオリティック分析の2つを併用し、メディアによる言語使用が日本社会のヒエラルキーや日本の象徴である皇族のアイデンティティを構築する現象に注目した。

6年分の全国紙1紙、2年分のダイジェスト誌（主要紙の記事をクリッピングした雑誌）に現れた皇室報道の分析の結果、政治・経済記事における政治家や財界人の場合と大きく異なり、皇族の発話はほぼ100%短縮句（「」）を使って直接引用され、さらに8割は短縮句に加え敬意表現（主に「です」「ます」などの表現）などのダイスケで直接性を明示する形で引用されていた。この傾向は皇族に対する発話においても同様であった。政治家や財界人の発話の引用では省略される「です」「ます」などが皇族の発話の引用に残っていることは、皇族は高貴な人々であるという印象を読者に与え、また皇族への発話の引用にも残っていることは、皇族に話しかけるときは敬意を表すのが普通であるというメッセージを伝えている。ゆえにこの引用の仕方は、皇族が高い社会的階級に属するというメディアのイディオロジーを反映し、同時に再生産していると指摘した。

2.3 三宅 和子「大相撲実況放送のメディア・ディスコースを読み解く ～どのような人間関係や価値観の共有が前提とされているのか～」

三宅は、私達が日々接するメディア・ディスコースが、実は人間関係の捉え方や価値観を形成し、再生産している事実に着目した。具体的には、日本語と同時に米語で放送されている大相撲のテレビ中継において、同場面の映像に付される日本語と米語のディスコースを比較対照し、日本語放送で暗黙の内に了解されている人間関係や価値観を浮かび上がらせという手法を用いて分析した。

解説者とアナウンサーのインターアクションを中心に見ると、日本語放送ではアナウンサーの質問がコメントするという形で話が展開していることが明確である。しかし米語放送ではそれほど明確な役割分担は存在せず、アナウンサーであってもコメントしたり解説したり、解説者であっても現実を行ったりする。また、日本語放送では解説者がアナウンサーの盛んなあいづちに支えられてひとまとめの情報を完結させるが、米語では両人はターンを同等に保持し、まとまった情報を独步で完結させることができる。これらの比較対照を通じ、日本語放送のインターアクションには権威や経験、情報の量や質の差に基づく上下関係が存在し、それが役割意識に反映して両者のディスコースを規定していること、また伝統的な所作や儀式を重んじる映像の提示と、それを受けて語られること・語られないことを通じ、伝統的国技としての相撲のイメージが作り出されていることなどを明らかにした。

このような日米比較により、日本語で「自明」と思われていたことへの問い直しとともに、メディア

—161—
が描く「現実」をクリティカルに読み解くことの重要性を指摘した。

3. 討論

引き続き、以上の内容の発表を踏まえた議論が行われた。発表後の発言には、指定討論者によるものと、フロアからのものがあった。

3.1 岡本能里子「アイデンティティの構築と再構築（強化）」

岡本は、メディアを通じてアイデンティティがどのように構築され、再構築（強化）されていくかというプロセスを、オリンピックや政治に関する最近の報道の例を挙げて説明した。日本やアメリカの国会における発言（特にラベリング）がメディアに取り上げられることによりアイデンティティが形成され、またそれが多用されることにより結果としてラベル自体が「現実」として強化される現象などがその例である。

また岡本は、各発表が内包する問題について論じた。それは、どのような分析方法を取るにしろ分析者自身のスタンスが問われる、という点である。特に批判する場合は、白己の立場を明らかにすることが求められると指摘した（この点については以下の議論を参照）。

3.2 フロアからの発言

質問が集中したのは、それぞれのアプローチとスタンスに関わるものであった。大奥への「クリティカル談話分析（政治学ではなく）」語学の中で行う意義は何か、佐藤への「研究者自身は誰とはどうこのようなスタンスを取っているのか、」三宅への「このような比喩は一般化に耐えるのか」などの質問がその例である。

議論の中で明らかになったのは以下のような点である。大奥は、クリティカル談話分析をディスコースに潜むイデオロギーの分析と捉え、「常識」を含む支配的イデオロギーを問題とし、それに異議を唱える、その過程で、コンセンサスの形成に対して影響を与える言語操作の過程を言語分析により明らかにしようとする（これがクリティカル談話分析における実践の一つである）。一方、佐藤にとって、クリティカル談話分析は数多くある談話分析のアプローチの一つであり、今回の発表では変異分析と相補うことに、質的・量的分析の限界を超えるために選ばれた分析方法と位置付けられる。そこで政治の意図はなく（そうであっても何らかの価値判断が伴っていることは否定できない）、casual readerにとって自明ではないかシステムマティックな分析を行うことによって見えてくる現象を明らかにするのが目的である。また、三宅の今回の研究の狙いは一般化ではなく、私達が普段「当たり前の」であることが受け入れられていることが必ずしもそうではないことをディスコースの特徴の比較によって顕在化することである。これから、メディア・ディスコースの分析にはさまざまなアプローチやスタンスがあることがある。

他にも多くの質問が寄せられたが、時間の関係で全ての質問に答えることができなかったのが残念である。それぞれの発表者が、今後の研究において何らかの形で解答を出すことを期待したい。

4. 結わりに

終了後、「このような議論をしているメリング・リストに参加させてほしい」と、このワークショップの関係者向けにメリング・リストを立ち上げているとの前提で（実際にはそうではないので）要望を述べた参加者が複数いたことは書き留めておきたい。今回のワークショップは研究者間の相互交流とこの分野の研究の活性化に寄与することを目的としており、歓迎すべき要素である。メリング・リストを、研究会かつ、ワークショップの継続的な、どのような形を取るかの今どこ定かではないが、今後もこの分野の研究に貢献する手段を考えていきたい。

また、企画責任者が参加している研究会で今回のワークショップの報告を行ったところ、特に外国人の参加者から積極的に発言をしたのが印象的だった。これは、今回のワークショップが国際社会における日本、皇族、相撲というように、日本に住む外国人
にとって興味深い話題に関わっているからであろう、考えてみると、今回扱った話題は、偶然選ばれたというより、日本（語）のメディア・ディスコースおよび日本（人）のアイデンティティを分析するにあたって扱わざるをえない問題であったのかも知れない。

最後になったが、この報告を書くにあたり、筆者自身、情報の送り手としての立場を意識せざるをえなかった、というのは、この報告（レポート）という行為自体が、学会誌というメディアで今回のワークショップで何が行われたかという「現実」やワークショップの参加者が何者かというアイデンティティを構築することにはかならなからである。その全てを語ることは不可能であり、そこには筆者の価値観に基づく取捨選択が必然的に伴う、メディア・ディスコースについて語る場合、情報の受け手として批判的に読むことが強調されるが、インターネットなどのテクノロジーの発達により誰でも発信者になりうる現代においては、情報の送り手として表現することに自覚的になることも同じくらい重要だろう。この報告をクリティカルに読んでいただければ幸いである。